

日本・スペイン交流 400 周年記念

通商交渉に夢をかける徳川家康と 夢ついでた伊達政宗

ロドリゴ・デ・ビベロの救出から支倉常長慶長達政使節へ



国宝「支倉常長像」

御宿町国際交流協会

— 目次 —

序文	02
I. 家康とロドリゴ・デ・ビベロの出会いと平和協定条項 (日西墨交流 御宿の岩和田村民がスペイン人を救出)	04
II. スペイン国王フェリペ三世の答礼使節大使セバスチャン・ビスカイーノが来日	07
400年前に起こった東北地方の地震・津波	10
400年前の外交史を語る証拠—家康公の時計	11
ハンス・デ・エバロがマドリッドで製作した「家康」と「フェリペ三世」の時計	12
濃毘数般(ノビスパン)メキシコ副王に宛てた家康の親書	13
セバスチャン・ビスカイーノの人物像	16
III. 地方の国際化—伊達政宗が慶長遣欧使節支倉常長を派遣	17
常長 メキシコと実りない通商交渉	18
常長 スペイン国王フェリペ三世臨席のもとで受洗	19
常長 ローマ法王パウロ五世に謁見	20
夢ついでた政宗の「支倉常長 慶長遣欧使節」	21
IV. 家康から政宗までの通商交渉の終焉(家光の鎖国)	23
V. 日本におけるキリスト教の殉難者等の関連年表	24
あとがき	32

発行年月: 2014年2月23日
編集/発行: 御宿町国際交流教会
〒299-5192 千葉県夷隅郡御宿町須賀1522番地
(事務局) 御宿町役場 産業観光課内
TEL 0470-68-2513

禁無断転写掲載

－ 序文 －

日本・スペイン交流 400 周年を迎えました。徳川家康が日本を統一して江戸に幕府を開いた数年後、日本とスペインの交流が始まりました。日本・スペイン交流 400 周年は仙台藩主の伊達政宗が「支倉常長 慶長遣欧使節」を派遣した 1613 年から起算して 2013 年と 2014 年を記念事業年としたものです。

慶長遣欧使節は伊達政宗が徳川幕府の許可を得て企画し、支倉常長を大使とした欧州使節団のことでした。目的はマニラ・ガレオン船貿易で潤うスペイン領メキシコと仙台藩の間に直接貿易を行うこと。スペイン国王とローマ法王に謁見し宣教師の派遣を依頼することにありました。

日本とスペイン領メキシコとの交流は 1609 年 9 月に千葉県御宿の岩和田村民がフィリピンの前臨時総督ロドリゴ・デ・ビベロ一行 317 人を台風遭難から救出し、家康や二代將軍秀忠の厚遇を得て「平和協定条項」が合意されました。1611 年 6 月にスペイン国王フェリペ三世の答礼使節セバスチャン・ビスカイノが来日し家康・秀忠に謁見しました。

ビスカイノの目的はスペイン国王から家康に洋時計を献上すること、日本とメキシコの通商とカトリック教の布教を求めることに加え、幻の「金山・銀山」を開発するための海岸線の測量調査等を行うことでしたが、家康・秀忠の不評を買うばかりか家康とロドリゴ・デ・ビベロの合意を台無しにし、交渉はまとまらず帰国することになりました。

セバスチャン・ビスカイノの帰国に際しては、慶長遣欧使節のために建造された「サン・ファン・パウティスタ号」に支倉常長一行と同乗しメキシコに帰着しました。日本とスペインの間には「貿易を最優先しカトリック教の布教を望まない日本」と「カトリック教の布教を最優先し貿易を望まないスペイン」にあって、相反する目的に交渉は困難を極めました。

これらを解決するために、幕府の許可を得て仙台藩主伊達政宗の慶長遣欧使節として支倉常長が派遣されることになりました。支倉常長にとって、メキシコ副王との実りない通商交渉にメキシコを後にしてカトリック教の世界最強の擁護者スペイン帝国とカトリック教の総本山ローマで宣教師派遣をめぐる交渉に見通しが立たぬまま、メキシコ→マドリッド→ローマへと遠く長い派遣命令でした。

本冊子では「通商交渉に夢かける徳川家康と夢ついていた伊達政宗」と題して、ロドリゴ・デ・ビベロの救出からスペイン国王フェリペ三世が家康へ答礼使節、そして慶長遣欧使節支倉常長までを順を追ってまとめ、その時代に起こった日本におけるキリスト教の弾圧状況を年表にしました。

御宿町での人類愛による 400 年前の日本とスペインの交流が時代の為政者に関わるとどのように外交政策が変貌していくかも読み取れることと思います。何卒ご一読賜れば幸いです。

御宿町国際交流協会
会長 土屋武彌

今から 400 年余り前、日本で最も権力のあった徳川家康とスペイン帝国の国王フェリペ三世の間に新たな外交が始まろうとしていた。

家康はメキシコ（当時はスペインの副王領）と直接交易を望んだが、カトリック教には警戒心を持っていた。メキシコはカトリック教の布教を望み、交易にまったく興味がなかった。

二つの国は、交易かカトリック布教かで目的を異にした。



フェリペ三世



徳川家康

I. 家康とロドリゴ・デ・ビベロの出会いと平和協定条項

1609年9月30日、フィリピン（当時はスペインの植民地）の前臨時総督ロドリゴ・デ・ビベロ一行が、マニラからメキシコに帰国途中暴風雨に遭遇した。岩和田村（現・千葉県夷隅郡御宿町岩和田）の田尻海岸沖に漂着し、乗員373名のうち317人が岩和田村民に救出された。これが日西墨交流400年の始まりである。



「サン・フランシスコ号乗員遭難救助」画
（御宿町歴史民俗資料館蔵）



ロドリゴ・デ・ビベロ一行が救出された
現在の御宿町岩和田田尻海岸（写真）

1609年11月、家康は駿府城で宣教師ルイス・ソテロを通訳としてロドリゴ・デ・ビベロを謁見した。家康もロドリゴ・デ・ビベロも全く知らない関係ではなく、過去において江戸とマニラの間で書簡や使節の交流があった。しかし、家康にとっては初めて会うスペイン人高官だった。

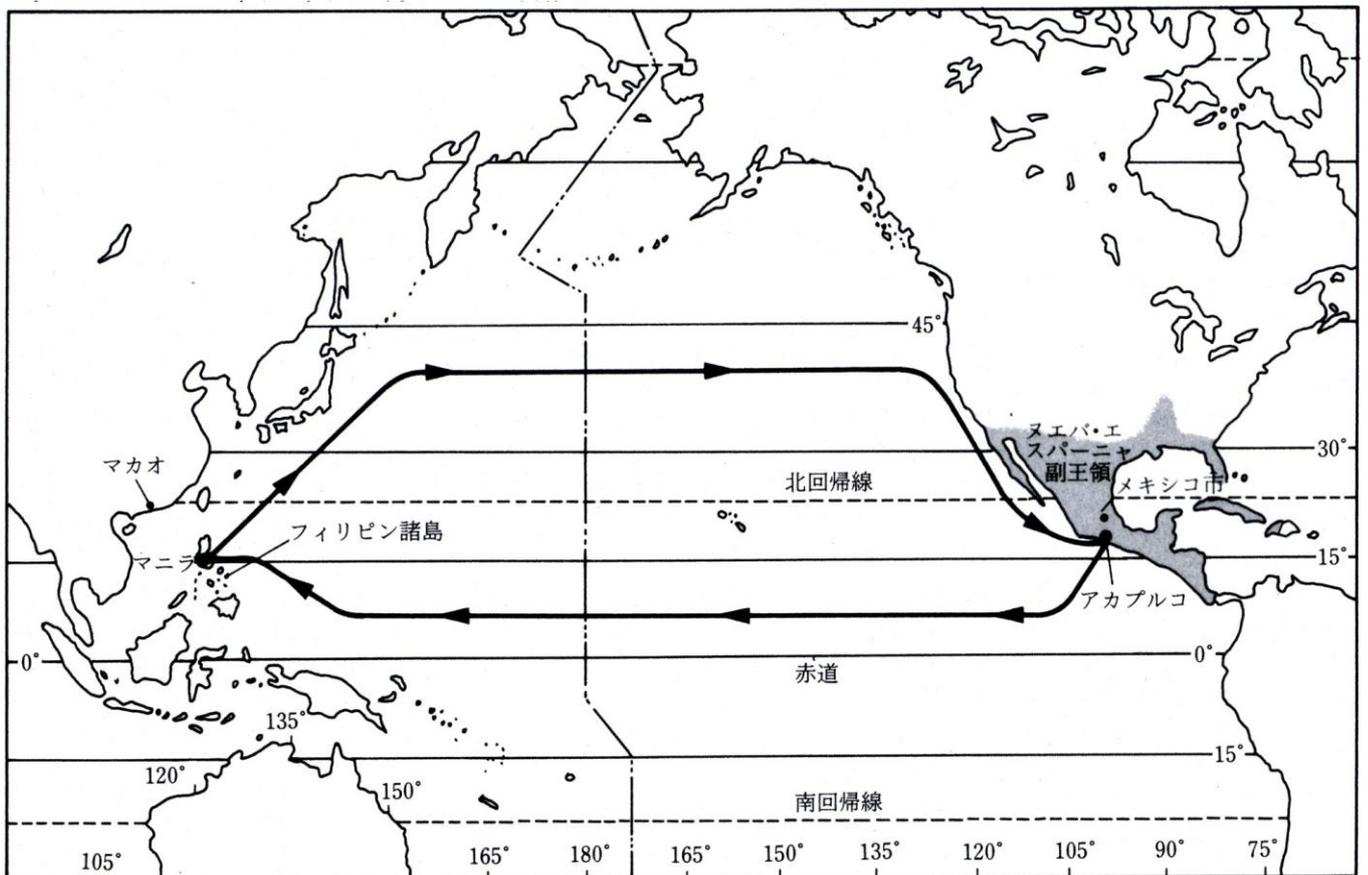
家康は漂着し全てを失っているにも拘わらず、私欲に走らず自分の宗教と主君フェリペ国王に忠節を尽くす律儀なロドリゴ・デ・ビベロを厚遇し、交渉に入った。

家康の要望は、メキシコと直接交易を望んでいた。そして銀の精錬技術を学ぶこと、日本では鉱石の半分を無駄にしているのもメキシコから50人の鉱山技師を派遣、必要経費は払うとのことだった。

これに対してロドリゴ・デ・ビベロは、独断で返答はできないが採掘された銀の半分は鉱山技師に4分の1は家康公に、残りの4分の1はスペイン国王に分配するという案を出した。そしてロドリゴ・デ・ビベロは、スペイン国籍の船が日本の港に着いたとき保護すること、カトリック教会設置を容認すること、オランダ人を日本から追放すること等を要望した。

これに対して家康は、「要望は全て叶えたいがオランダ人追放だけは難しい。彼らには保護を約束していて、この政策は変えられない」と答えた。

この様な経緯のうちに、家康とロドリゴ・デ・ビベロの間には、1610年2月2日付で「平和協定条項」が作成された。



メキシコとフィリピン間のガレオン船貿易路

家康はカトリック教を認めなかったものの緩やかな禁教政策で臨んだ。オランダやイギリスは新教国となっており、海外交易の促進に向かう家康はこれを放任した。しかし家康とロドリゴ・デ・ビベロの「平和協定条項」は結実しなかった。

1610年8月1日、ロドリゴ・デ・ビベロらは日本で建造された西洋式帆船の「サン・ブエナ・ベントゥーラ号（120トン）」で浦賀を出港した。帰国時に家康から4,000ドゥカド（1ドゥカド≒150ドル）を借用し、同年11月13日、アカプルコに無事帰着した。この船には京都の商人・田中勝介ら22人が同行したが、100人ぐらしか乗船できないため、岩和田村で救出された317人全員が乗船できず、残された200人以上は別に用意された船でマニラに戻った。

ロドリゴ・デ・ビベロをメキシコに届ける送還船の大使は、当初ルイス・ソテロ神父（後記で登場）が決まっていたが、病気のためフランシスコ会のアロンソ・ムニョス神父が代役としてこの任を務めた。

ロドリゴ・デ・ビベロに随行した田中勝介ら日本人一行は、4ヶ月間メキシコに滞在した。その間に洗礼を受けカトリック教徒になった者もいた。

日本人一行はメキシコにとって歓迎されざる客だった。第1の理由は、せっかく開拓したメキシコとフィリピン間のガレオン船貿易を侵害されることだった。第2の理由は、太平洋貿易航路の航海技術を盗まれることだった。第3の理由は、スペインが嫌っているオランダ人の追放を家康が認めないことだった。

その結果として、メキシコ側は、日本人たちが帰国するための「サン・ブエナ・ベントゥーラ号」を買い取ると称して取り上げた。太平洋上のガレオン船貿易を守る決意があった。

Ⅱ. スペイン国王フェリペ三世の 答礼使節大使セバスチャン・ビスカイーノが来日

1611年3月22日、田中勝介ら日本人一行はアカプルコを出帆し、マニラに寄らず直接日本に向かった。

この船は日本から乗船した「サン・ブエナ・ベントゥーラ号」ではなく、メキシコが建造した「サン・フランシスコ二世号」だった。「サン・フランシスコ二世号」にはスペイン国王が答礼使節団を派遣し、答礼大使にフィリピン方面艦隊司令官の経歴を持つ軍人セバスチャン・ビスカイーノが任命された。乗組員61人と送還される日本人一行が乗船し、1611年6月11日に浦賀に入港した。

1611年6月22日、ビスカイーノは通訳のソテロを同行し、江戸で將軍秀忠に謁見し、同年7月4日彼らは駿府に赴き大御所家康に謁見した。ビスカイーノはスペイン国王の答礼大使として、家康にスペイン製の機械式携帯「洋時計」を献上した。

しかし、ビスカイーノ一行は日本にとって有り難くない客で、一年前にメキシコで日本人一行が受けた行為の裏返しとなった。

第1の理由は、家康がメキシコと交易を強く望んだがメキシコはカトリックの布教を交渉の中心に置いたためである。第2の理由は、スペインの嫌うオランダがイギリスのウィリアム・アダムスを窓口到家康を取り込んでいたことである。

オランダは交易と布教を完全分離し、日本には交易だけで接した。そして、スペインは先ずカトリックを布教し、信者が勢力を拡大したときに軍隊を派遣して日本を占領すると家康に中傷した。オランダにとって、メキシコは日本との交易既得権を侵す危険な存在だった。

ビスカイーノの実際の使命は、第1に日本人商人を送還すること、第2にロドリゴ・デ・ビベロが借りた4,000ドゥカドを返すこと、第3にサン・ブエナ・ベントゥーラ号のメキシコでの売却代金を支払うこと、第4にロドリゴ・デ・ビベロが受けた恩恵を家康に感謝すること、第5に通商とカトリック教信仰の



セバスチャン・ビスカイーノ
(提供：メキシコ大使館)



ルイス・ソテロ
『異国叢書』より転載（雄松堂書店発行）

協定を日本と結ぶこと、第6に日本沿岸調査を行い幻の「金山・銀山」を開発することだった。但し、この探検目的は日本側に伝えられていなかった。

ビスカイノは江戸で将軍秀忠に謁見し、想像もつかないほどの盛大な儀式で迎えられ、家康のいる駿府城に赴いた。

ビスカイノはロドリゴ・デ・ビベロが苦心して平和協定条項の合意を得た家康の側近本田正純と会見した。この会見でビスカイノは、海岸線の測量許可を求め、日本に向かう途中に損傷したサン・フランシスコ二世号の代わりとなる新しい船の建造を要請した。

更に外交とは言い難い方法で、日本からオランダを追放することを要求し、通訳のルイス・ソテロと共に「日本は海賊との通商を許可する地域との関係を維持してはならない」と主張した。

家康の外交顧問ウィリアム・アダムス（三浦按針）は、「ビスカイノはスパイだ」という噂を広め、将軍秀忠の猜疑心をあおり、更に「ヨーロッパでは国の理性に反する事を理由に他国が統治する港の検査を行わないこと」を確認した。

そして平戸の英国商館の代表リチャード・コックスは、フェリペ三世による征服の脅威について、「修道士は反乱を起こすために送り込まれたのかもしれない」と述べ、この発言はすぐに幕府に伝わった。

その後もビスカイノは許可を得て本州北東の港の測量を続け牡鹿の「月の浦」で、しばらくの間、時を過ごした。

1611年6月22日、ビスカイノが江戸城でルイス・ソテロを通訳として将軍秀忠に謁見した。6月24日、江戸を発ち仙台に帰国途中の仙台藩主伊達政宗は、江戸の路上でビスカイノと偶然出会った。二人にとって初めての出会いだった。

政宗はフランシスコ会員のルイス・ソテロに特別な好意をもっており、ビスカイノが三陸海岸を探検した折の1611年11月16日、松島の瑞巖寺でビスカイノとルイス・ソテロを歓待した。政宗はこれより数ヶ月前、支配地におけるカトリック教の布教活動を許可していた。政宗はマニラからアカプルコに向かう途中のマニラ・ガレオン船の避難港を提供することに興味を示し、新船の建造とスペインへ使者の派遣計画を示した。

ビスカイノと幕府の交渉はほとんどが外交上の意見の相違で、いくつかの不測の事態を生じた。特にロドリゴ・デ・ビベロのように、日本の衣装を身に着け、日本の作法に従うように言われた時、ビスカイノは「ロドリゴ・デ・ビベロは助けを求めて来たが、自分は世界で最も偉大な君主フェリペ三世の大使として来たのだ」と即座に言い放った。

1612年の初め、ポルトガル船のマドレ・デ・ディオス号事件からスキャンダルが明らかになり幕臣の岡本大八は死罪、肥前有馬の城主有馬晴信は切腹に処せられた。彼らはいずれもカトリック教徒だったことから、家康は駿府城の家臣や将軍の側近の中にもカトリック教徒がいることを知り、対象者は全員職を追われた後に、国外追放された。幕府はカトリック教に対する態度に重要な変化を生じさせていった。

ビスカイノは、測量した地図を届けるために浦賀港に戻った。そして幕府の承認が引き続き得られることを期待して、航行不能なまでに損傷したサン・フランシスコ二世号に代わる船の建造支援を求めたが、その要請は断られた。ビスカイノは損傷激しい船で「金銀島」搜索を続行した。浦賀港から600マイル（約965キロメートル）東にあるはずの「金銀島」の緯度に向かったが発見できず、やっとのことで浦賀港に戻った。

ビスカイーノはマルコ・ポーロの「金銀島」に夢を追い遠征に出発したが、実際には何も達成することはできなかった。幕府の支援を受けられず、スペイン人の商人に新造船の資金を借りようとしたが、これも拒否された。彼はメキシコに戻れる可能性もなかった。

一方、16世紀初め、宗教改革によってキリスト教が分裂した。オランダは商人の中層階級が力をつけて、プロテスタント主義を選んだ。交易の締結を求めて船を建造し、航海知識を幕府に提供したことにより親交関係ができた。

幕府はオランダを敵視するメキシコと条約を結ぶことに関心が薄れていった。家康とロドリゴ・デ・ビベロの間に交わされた「平和協定条項」は、ロドリゴ・デ・ビベロが離日後すでに2年を経過していたにも拘らずスペイン国王フェリペ三世から返答がなく、1613年6月になって、やっと明確な返答を受けるに至った。

フェリペ三世の返答には「友好関係と通商関係を結ぶ印として、提示したことを全て実行するように命じた」と記されていた。

これは、ロドリゴ・デ・ビベロが最高権力者たちに粘り強く訴えたおかげだったが、返答が遅れたのはマニラ・ガレオン船貿易の独占状態が崩れていたこと、即ちガレオン船貿易に占める日本との貿易割合は低いが多く銀が流出していく事態の理由があった。

スペイン国王フェリペ三世から幕府に返事が来た時には、オランダはすでに日本に進出し、ロドリゴ・デ・ビベロが日本の岩和田村に漂着する1ヶ月も前の1609年8月24日に通商条約を結んだこと。イギリス人も、日本での存在感を強めるよう戦略的な両国間の協定をすでに結んだことを見逃してはならない。

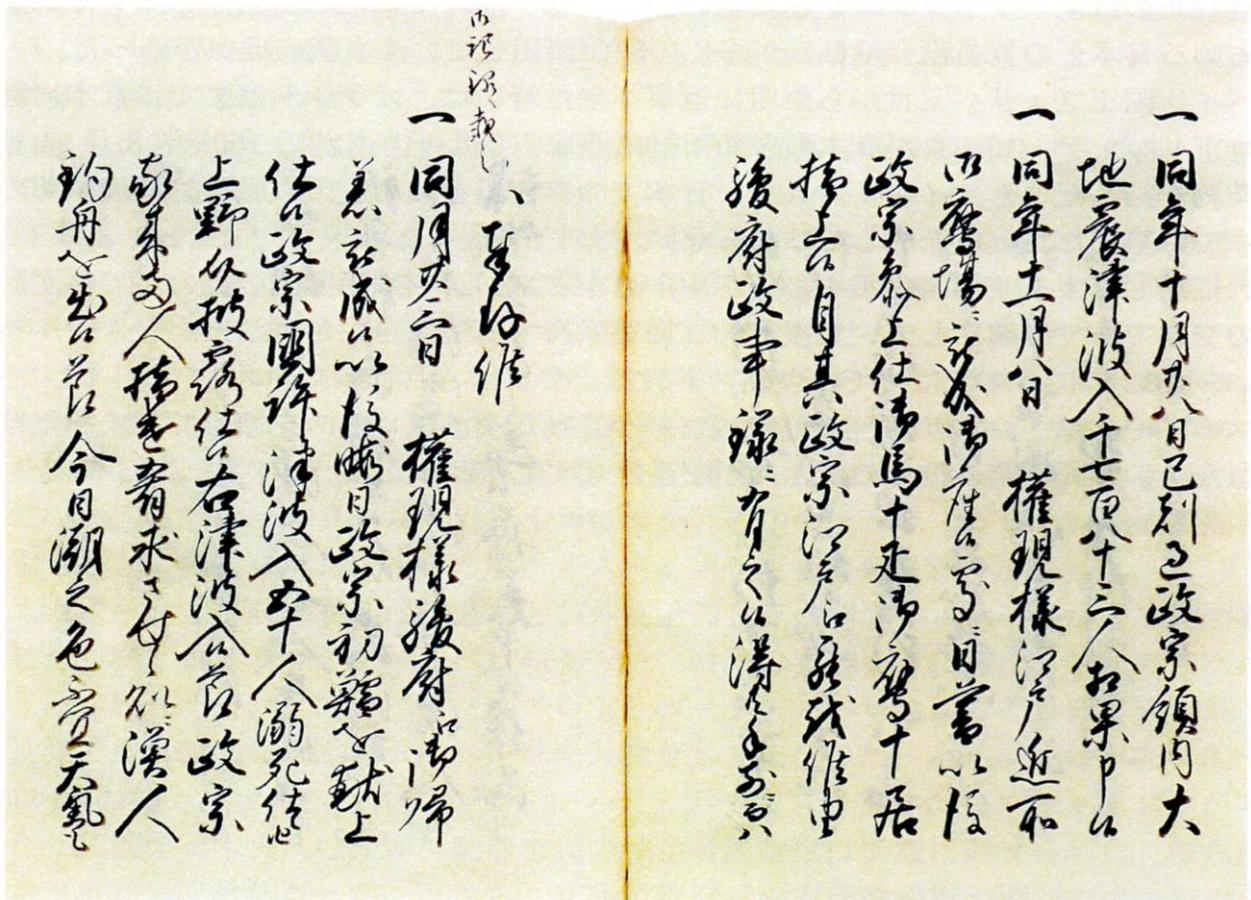
これに対してカトリック主義をとるポルトガルとスペインは両国間の協力ができず、日本との交易ですでに確立していた優先的立場を保持する機会を生かすことができなかった。さらに、1612年に日本ではすでにキリスト教禁止令が出されていた。

ビスカイーノは、ロドリゴ・デ・ビベロがつくった交渉プロセスを壊してしまったばかりではなく、答礼使節の役目のほとんどを果たせずに終わった。

400 年前に起こった東北地方の地震・津波

1611 年、東北地方の三陸海岸から相馬（福島県）までの広い地域が、慶長奥州地震とその津波により大被害を受けた。伊達藩と南部藩の被害は特に大きく、地震はマグニチュード 8.1 と推定され、津波により伊達領内で 5000 人以上の犠牲者と家畜に多大な被害が出たと伝えられた。多くの犠牲者は津波による溺死者だったようだ。

この災害を偶然にも大船渡の沖から目撃した人達がいた。この人達はスペイン国王フェルペ三世の答礼使節として 1611 年 6 月 11 日、相模国の浦賀港に 1,000 トン近くのスペイン軍用帆船で入港していた。この船からは日本人も上陸したが、浦賀の人々はあまり驚かずにこの大きな帆船を迎え入れた。上陸した日本人はメキシコから送還された田中勝介らで、ビスカイノも大船渡の沖からこの惨状を目撃した。



記録拔書之五(記録拔書の内)仙台博物館蔵

1611(慶長 16)年 10 月 28 日に仙台藩沿岸を襲った津波に関する仙台藩側の記録のうち、現存するもので最も古いもの。津波で 1783 人の犠牲者があったこと、船に乗った政宗の家臣が津波に流され、山の松の木に船をつないだというエピソードなどを記している。「記録拔書」は 1684(貞享元)年に幕府の命を受けた仙台藩が、織田信長・豊臣秀吉・徳川氏との関係を中心に伊達氏の歴史をまとめた史書。全 6 巻。なお、幕府に提出されたものは、後に「譜牒余録」に収録されている。

400 年前の外交史を語る証拠—家康公の時計

静岡県静岡市に、江戸幕府を開いた徳川家康の霊廟久能山東照宮がある。その東照宮にはスペインが世界最強の国力を誇った時代に作られた「西洋斗景（せいようとけい）」が保管されている。

この時計は 1611 年 7 月 4 日、スペイン国王フェリペ三世の答礼使節大使セバスチャン・ビスカイノが家康に駿府城で謁見したとき贈られたものである。

2009 年 9 月 30 日、「日本とメキシコ交流 400 年の集い」で、ミゲル・ルイス・カバーニャス前駐日メキシコ大使が講演の中で、この時計の由来について、400 年前の日本の恩義「岩和田村民に救出されたロドリゴ・デ・ビベロ一行」のことを説明し、その後のレセプションでメキシコ関係者や日本の皇族方に「過去に録音したこの時計の時報の音」を披露した。

400 年前の交流について、この時計以外歴史的由来がはっきりしている遺品はほとんどないといわれている。

「家康公の時計」（洋時計）は、どのような価値があるのか。第 1 に、スペイン国王のお抱え時計師でフランドル人のハンス・デ・エバロが 1581 年マドリッドで製作し、ビスカイノが家康に献上した歴史性をもつこと。第 2 に、16 世紀のフランドル時計であること。第 3 に、99%オリジナル部品が現存して残っていることである。

日本ではビスカイノが帰国するにあたって家康公がメキシコ副王に持参させた親書の重要な内容から歴史的意義が深いものとして 1979 年国の重要文化財に指定された。



家康がスペイン国王から贈られた
洋時計（国重要文化財）



西洋時計文字盤下の銘板
「HANS DE EVALO ME FECIT EN MADRID. A. 1581
（1581 年マドリッドでハンス・デ・エバロが
製作した）」と刻銘

ハンス・デ・エバロがマドリッドで製作した「家康」と「フェリペ三世」の時計

スペインに現存する最古の機械式時計は「エバロの時計」をいい、今では「家康公の時計」（洋時計）と「フェリペ二世の時計」の2つしかないと言われている。

オックスフォード卒のアトキンソン伯爵は、「国王の権威を象徴する 16 世紀の時計が如何に価値をもつものか、日本人達には理解しにくい。家康公の時計は世界的にみても大変貴重である」と言う。

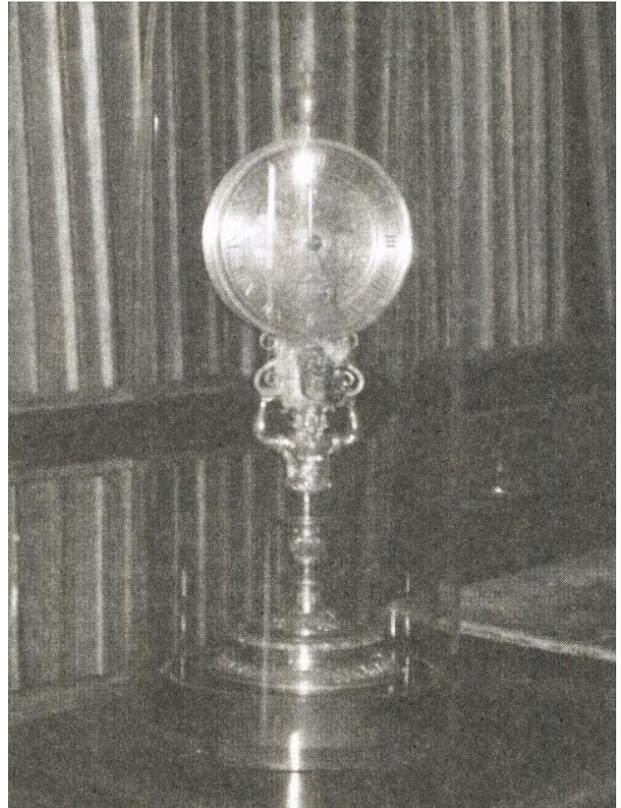
「家康公の時計」は 1581 年に製作、銅と真鍮製の機械式（ゼンマイ）時計で時報や目覚まし音の機能を持つ TEMPLE 型（寺院型）の携帯時計である。寸法は高さ 21.5 センチ、幅 12.5 センチの小さな時計に、高さ 25.0 センチ、幅と奥行き共に 12.5 センチの豪華な革ケースがついている。16 世紀中期に日本にもたらされた西洋の機械式時計が日本文化に大きな影響を与え、当時は最先端の科学技術の象徴だったと評される。

この貴重な時計は久能山東照宮に国の重要文化財「洋時計」として所蔵されている。しかし史実の発祥地、御宿町には重要文化財を展示する施設がない。400 年前の難破船のスペイン人救出に人類愛の誇りを伝える御宿町に「家康公の時計を中心とした展覧会を实行できないか」と東照宮や関係者からの要請も実現に至っていないのは残念である。

「フェリペ二世の時計」は 1583 年製作、金メッキで加工された真鍮製の機械式（ゼンマイ）時計で、ランプ機能を持つカンテラがついた CUSTODIA 型（クストディア型）の卓上時計で寸法は高さ 52 センチ、幅 14.5 センチ、奥行き 17 センチあり、スペインの国宝としてマドリッド郊外のエル・エスコリアル宮殿フェリペ二世の書斎に所蔵されている。

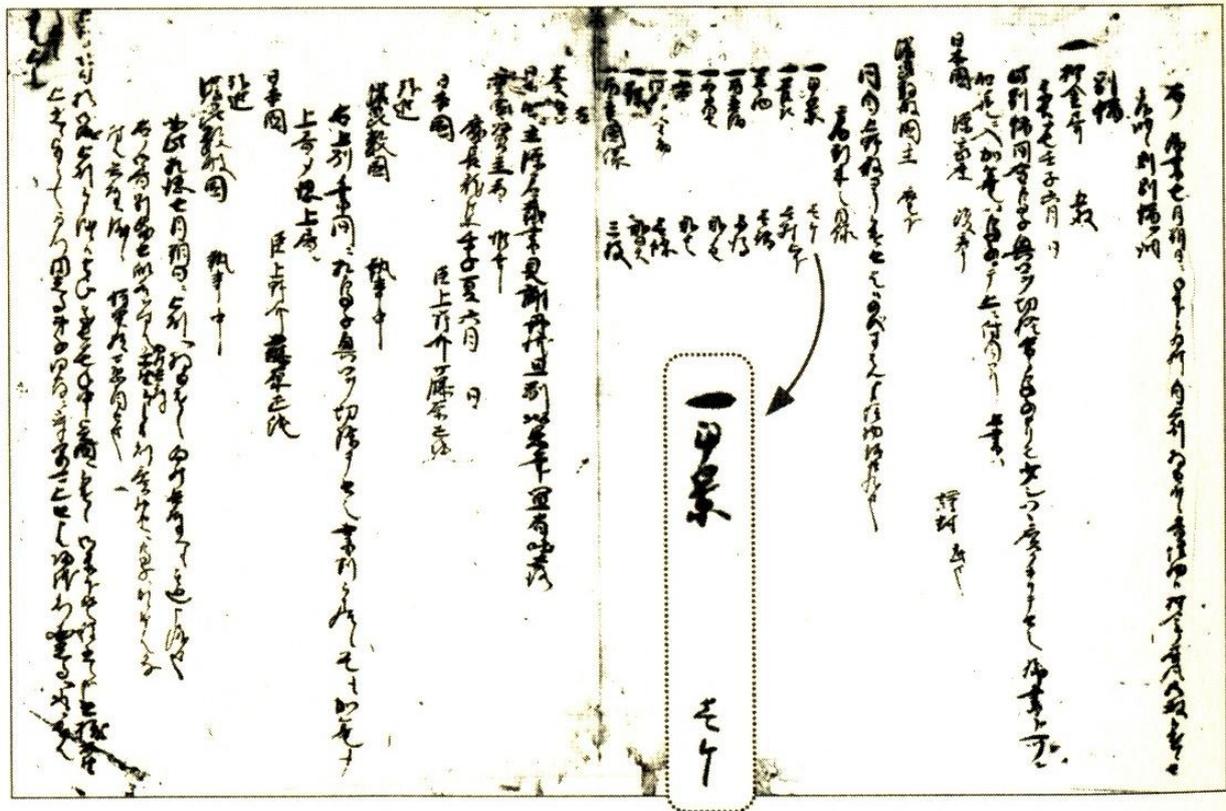


フェリペ二世が建てた
エル・エスコリアル宮殿



エル・エスコリアル宮殿書斎の
「フェリペ二世の時計」

濃毘数般（ノビスパン）メキシコ副王に宛てた家康の親書



「一斗景 壺ケ」と記載された「異国日記」
（京都・金地院 蔵）

ビスカイーノが帰国するに当たってメキシコ副王に宛てた家康の親書がある。金地院崇伝の「異国日記」に記されたきわめて重要な内容を持つ返書案である。ここにビスカイーノからの贈り物の受取目録がある。「一斗景 壺ケ」の項目があった。その右ページに家康の政治外交顧問金地院崇伝がスペイン国王フェリペ三世からの贈り物を記しながらメキシコ副王宛の返書案を考えた重要な内容を含んでいる。以下は 1612 年 6 月の返書案の現代語訳である。

「日本国の源家康は、喜びと敬意を持って濃毘数般の副王に返書します。

私は閣下の書簡とともに贈り物を受け取りました。誠に感謝いたします。一昨年（1610年 9 月 30 日）、貴国の商船が暴風雨に遭い、船が粉々に砕けました。思いがけず貴国の方たちが日本へ来られることになり、我が国は遠来の客人をもてなすことになりました。また帰国のために船を一隻用意し、幸いにも恙無く到着したという知らせを受けました。貴国と我が国の友好関係が深まり、毎年商船の往来や交易をする者たちが両国のために大いに役立っていくことでしょう。

ところで、日本国は神と仏の国であります。我が国は開闢以来、神と仏を尊崇し、これは他にもまして重要なことです。君臣の忠義の道をかたく守り、すべての者がこの摂理を守ることに変わりはありません。皆この摂理を守ることを誓い合い、神をひたすら信じております。日本では神の教えの下に仁義礼智信の道を守って生活しており、これは決して嘘偽りなどではありません。

貴国で信じている教えは日本の教えとは、はなはだ違っています。貴国での教えは我が国においては無縁のものであり、我が国の人々を救うことにはなりません。この様な教えを広めることは思い留まるべきであり、我が国では許可できません。

今後はただ商船交易による売買によって相互の利益を得ることだけを考えるべきです。貴国の商船が我が国へ到着する時には、全国どの港でもいささかも不遇な扱いを受けることのないよう、厳しく命じていくつもりです。安心して我が国との交易をを拡大することをお考え下さい。ささやかながら私からの贈り物をお受け取り下さるよう願います。

慶長 17 年（1612 年） 夏 6 月」

日本國 源家康 儀章
 濃尾數般副王 麾下
 本輪董司事三國指况又方物水目銀銀と惠
 泉長爪兼お輝抜損不意通未吾邦不性
 着料と告報備候不後貴國と吾邦法
 為世為人何善政も言り抑吾邦者神國也
 同而中別多望君臣忠義と通正朝國と
 此執事正者必打賣の成邦者必打討是
 不在於茲乎貴國之所用法其趣是黒
 難度於弘け志者不可止不可用は
 國へ商船未朝へ既雖到者何く國へ
 廣令道安心莫海幸邦と巨備別幅板
 傷名中慶長十七龍集生子夏六月
 石下事少六月廿二日 御城の上
 伊也九三日、向上新下橋ノ間、空鳥
 書け九三日、也一河、大子口奥ノ事
 書く、傷事大、年ノ奥、年ノ上
 石原事大、日、海、大、玉、角、大、九、河

「異国日記」にある家康親書下書きの部分
 (京都・金地院 蔵)

家康はスペインに対して、海外交易は望むが日本でのカトリック教布教はやめるべきだと直接的な表現で述べている。

1613 年 10 月 28 日、ビスカイーノは支倉常長の慶長遣欧使節団の船で日本を出航し、1614 年 1 月 28 日、メキシコに帰国した。

その直後の 1614 年 2 月 1 日、家康は金地院崇伝に「バテレン追放令」を起草させ、徹底的禁圧を開始した。つまり濃尾数般副王はキリスト教布教禁止の最後通告を受けたことになった。1599 年以後、家康はスペインを友好国と考えてきた。フランシスコ会やドミニコ会などのカトリック布教を許可し、キリシタン宣教師の来日ラッシュとなり、江戸で

教会の慈善病院の建設などを認めていた。しかし家康は方針転換を図った。

その理由として、洋時計を持って答礼使節として来日したビスカイーノの訪問が引き金となっているとしか思えない。1611年7月ビスカイーノが家康に謁見した時、ウィリアム・アダムスが故郷イギリスに宛てた手紙の中に見ることができる。

ビスカイーノは駿府で家康に会い、ロドリゴ・デ・ビベロに対するお礼とともにスペイン国王フェリペ三世からの金銀島発見の任務があり、日本近海を探索するために海岸線を地図にする許可を求めた。家康はこの求めに快諾した。

しかしビスカイーノが二度目の通商条約を結んだばかりのオランダ人の追放を求めたことに対し、家康は日本国のことに他国が口を出すことはできないと退けた。ビスカイーノは、スペイン国王は日本との交易など歯牙にもかけないと公然と家康に言い放ったばかりか、スペイン国王は世界最強の支配者だから日本はスペイン国王に平伏したほうがいい。スペイン国王は全ての異教徒が聖なるカトリック教を学び救われることを望んでいるとまで言い、傲慢な態度をとった。ここに来て家康は怒りを爆発させた。

家康がビスカイーノとの謁見で望んだことは、ロドリゴ・デ・ビベロに依頼した鉱山技術者50人の日本への派遣だったが、一人も連れて来ていない。そしてロドリゴ・デ・ビベロ一行の帰国のためにサン・ブエナ・ベントウーラ号の提供や、4,000ドゥカドもの多額の用立てに対する一言の回答も持ってこなかったことに怒りを募らせた。通訳がイギリス人のウィリアム・アダムスなので少し誇張して伝えたのかもしれないが、スペイン帝国の国王使節大使であれば何でも許されるという意識があったのではないか。すでに家康とビスカイーノの間には交渉決裂状態となっていた。秀忠と家康はその後、二度とビスカイーノに会おうとはしなかった。

ビスカイーノは家康を嫌っており、帰国報告は「日本人というのは世界中で最も邪悪な民である。彼らを相手に、大変な苦勞をさせられた」との一文で終わっている。

セバスチャン・ビスカイーノの人物像

百科事典や歴史書によると、ビスカイーノの正確な誕生日および命日は不明であるがスペインのウエルバあるいはエストゥラマドレで 1550 年頃に生まれ、1615 年以後にメキシコシティまたはアカプルコで亡くなったという。人柄は、狼藉者ではなく任務に忠実で信心深い紳士で、裏切られ中傷を言われ不利な状態に落とし込まれても挫けず最後まで過ちがないことを説明しようとした人物のようである。

1580 年即ち日本に来る約 30 年前、イスパニアとポルトガルの戦いに騎兵隊で参戦し、1586 年フィリピンで商人として仕事の成功を収め、その帰路バハ・カルフォルニア半島の先端でイギリスの海賊に襲われたが、大破した船を修理してヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）の港に着岸した。

1596 年、カリフォルニア半島の沿岸調査では、太平洋岸メンドシノ岬を越えた北緯 43 度までの地形を調査をし、航海に必要な木材・水・バラスト石の入手地区や太平洋航路の避難港を調べ、調査した各地を命名した。現在アメリカの領土になった太平洋岸の町モントレイ・サンディエゴ・サンタバーバラなどの地名はビスカイーノが命名したものである。その後、ヌエバ・エスパーニャの海に出没するオランダの海賊を撃退したり、市長を務めたりもしたという。

ビスカイーノが当時の地球の半分以上を移動した大物だったことは間違いない。そして、日本に来たことは確かで、その証人として徳川家康・徳川秀忠・伊達政宗がいる。ビスカイーノが浦賀に着いた時は 60 歳を超えていたと思われる。400 年前の 60 歳は長命だったろう。支倉常長一行とメキシコに帰国したとき、ビスカイーノの肖像画が残り、彼の名前が使われた公園が 1993 年にユネスコに登録されている。

ビスカイーノは家康や秀忠には理解されなかったが、スペイン国王大使であり、物理学者、探検家、軍人、商人、市長など多方面にわたる経験と実績を持つ人物だった。

Ⅲ. 地方の国際化—伊達政宗が慶長遣欧使節支倉常長を派遣

伊達政宗は仙台藩 62 万石を所領する東北最強の大名だった。政宗の長女・五郎八（いろは）姫が徳川家康の 6 番目の息子の松平忠輝に嫁ぎ、政宗は徳川ゆかりの松平姓を授かった。

政宗も家康同様にメキシコと直接貿易を望んでいた。そしてカトリック教にも好意的だった。幕府に事前の許可を得た政宗は、自分の領地にメキシコとの条約の見返りにマニラ・ガレオン船をサポートする港を提供するための使節を支倉常長に命令し、宣教師の派遣を求めるためにマドリッドとローマに支倉常長を派遣することにした。この目的地を決めるに際して、ルイス・ソテロが本州北部の仙台に司教区を置くことに興味があったのである。政宗は「慶長遣欧使節」をより公的な性格をもたせるために、ソテロの助言により、ビスカイノにこの使節に参加することを頼んだ。



仙台城の大広間で、政宗から使節派遣の計画を聞く常長ら
「政宗・ソテロ・常長図」（仙台市博物館蔵）

常長 メキシコと実りない通商交渉

政宗の命令により支倉常長が率いる慶長遣欧使節には、ビスカイーノがサン・ファン・パウティスタ号の船長兼司令官として同行することになった。使節団一行は武士や商人から構成された180人で、修道士のルイス・ソテロも同行した。

1613年10月28日、使節一行は仙台藩・牡鹿半島の月の浦を出港した。政宗の遣欧使節は、地方政権がおこなう国際化だった。航海中に種々の争い事があったが、その最も大きなものはビスカイーノとソテロの対立であり、常長を悩ませた。その結果、修道士のソテロが使節団を主導することになった。

1614年1月28日、使節一行はメキシコ太平洋岸のアカプルコに入港した。アカプルコでは政庁などのもてなしを受け歓迎ムード一色だった。しかし3月になり日本から運んできた荷物の扱いをめぐって、日本人とアカプルコ住民との間で流血騒ぎが起って長居できる状態でなくなり、一行はメキシコ市を目指して出発した。

ビスカイーノとソテロの関係は、将軍家からメキシコ副王宛に預かった贈り物をめぐり完全にこじれてしまった。ビスカイーノが日本人の加勢を得たソテロの行動に怒り、それ以後、使節一行とは別行動をとるようになった。

1614年3月24日、常長一行はメキシコ市に入った。メキシコ市は、先住民インディオが築いたアステカ帝国を滅ぼしたスペイン人のエルナン・コルテスが副王の宮殿を中心に創建した政治・軍事の拠点だった。

副王のガダルカサル侯（ディエゴ・フェルナンデス・デ・コルドバ）が常長に初めて会見した。常長は、通訳のソテロを通じて政宗の書状を読み上げた。「キリスト教を領内の仙台藩に広めたいので、今般、ソテロに3人の家臣を伴わせ、メキシコに派遣した。3人のうち支倉常長は欧州まで遣わす。宣教師の方々が仙台藩に来られることを願う」と。カトリック教への熱意を示し、通商について「メキシコの航海士・水夫を頼りにしており、今後、船で自由に往き来できるようにして欲しい」と書かれていた。

ところが、使節一行が受けた扱いは次の通りだった。使節一行のうち、支倉常長と随員6人、その他3人の計10人を除き、残りの帯刀者は武器を取り上げられた。使節一行と別行動をとったビスカイーノが先に副王に伝えていたことは、「幕府はカトリック教の弾圧を強め、江戸で20人以上の信徒を処刑した。常長一行の使節は通商が狙い」と断言した。ビスカイーノが日本滞在中に家康から冷遇された個人的恨み、そしてソテロに主導権を握られ振り回された憤りがあった。

アカプルコで流血騒ぎが発生したことを知った副王は、常長一行がまだメキシコ市に到着していない1614年3月4日に武器の取り上げについて副王の命令書（係留命令）を発した。

常長はアカプルコの流血騒ぎの仕返しに執拗な抗議をしたが、「没収ではなく、帰国の際にお返しする」と突っぱねられた。常長は「武器問題で交渉決裂しては君主の政宗に会わず顔がない」と妥協し、侍たちをどうにかなだめた。

常長は副王に対して「使節一行のうち商人たちは積荷の売買が全て終わり次第、速やかに帰国させていただきたい」と申し出た。これに対して副王は、「パウティスタ号の操船はメキシコ航海士・水夫らの力が必要だ。船員の休養や船体の点検、補修に時間がかか

る」として、商人たちの早期帰国は絶望的となった。バウティスタ号のアカプルコ港に留め置き命令は、副王からアカプルコの司令官にすでに届いていた。バウティスタ号留め置きに要する水夫らの前渡し給料について双方の金銭の激しいやり取りに、副王から「ヨーロッパに行く資金を援助する」と譲歩を引き出したが、早期帰国を希望する日本商人らの出帆はスペイン国王の命令が出るまでアカプルコに留め置きとして目途が立たなかった。1614年5月28日、メキシコでの交渉が不首尾に終わり、落ち込み気味の常長一行はメキシコ市を出発してベラクルスに向かった。

同年6月10日、常長一行は大西洋を渡る意外に進む道はないと信じ、スペイン艦隊に乗船し、ベラクルスのサン・ファン・デ・ウルア要塞からスペインに向かって出航した。常長一行のヨーロッパ組は、宣教師らを入れてもをわずか約30人にすぎなかった。

常長 スペイン国王フェリペ三世臨席のもとで受洗

1614年10月5日、常長一行はスペイン南部の港町サンルカル・デ・バラメダに入港し、セビリアに到着した。セビリア市は常長一行のマドリッドまでの旅費に1,000ドゥカドという枠をはめながらも、援助することになった。援助することでセビリアから早く去ってもらった方が得策であると判断したからだった。

「使節支倉常長は徳川家康の使節ではない」「ルイス・ソテロは分別がない」と不評がスペインに確実に浸透していたが、常長とソテロの耳にはまだ入っていなかった。

1614年11月25日常長一行はセビリアを出発、12月20日、首都マドリッドに入った。マドリッドではスペイン国王フェリペ三世に謁見できる日を待ち続けた。

スペイン側は常長一行の取り扱いに困っていた。その理由は政宗と家康の関係にあった。「日本の最高権力者は家康であり政宗ではない」「その家康はメキシコとの交易を望んでいるが、カトリック教の布教は望んでいない」「常長一行が日本を発つ前に、将軍秀忠はカトリック教の弾圧を実行し信者らを次々と処刑している」「交易と宗教分離政策をとる家康・秀忠父子に対して、一大名の政宗はカトリック教を本当に布教できるのか」「家康が使節派遣を認めたのは交易に限ってのことでカトリックに踏み込めば政宗をつぶすはずだ」などと調べていた。

一方、スペイン国王の諮問機関・インド顧問会議は、「政宗はイタリアの小諸侯並み」と評したのは、ビスカイノの報告書を読み、常長やソテロから間接的に聴いた家康と政宗の関係を調べたことによるものだった。インド顧問会議は、「スペイン国王は支倉常長と会う必要はない」と主張するものの、「国王に判断を仰ぐ」との方針に結論づけた。

1615年1月30日、常長ら使節はスペイン国王フェリペ三世によろやく謁見できた。フェリペ三世は国政に熱心ではなく、日本の政治動向におよそ関心がなかったが異教徒の国から来たことへの物珍しさと優越感から謁見を許した。

常長は「国王陛下の御前でカトリック教の洗礼を受けたいと」述べ、政宗からの書状と交易や布教を求めた条約案を差し出した。

フェリペ三世の答えは「洗礼出席については快諾」「交易については時機をみて話し合う」「寺院を設置する費用は出せない」「日本に新たな司教を置くことは検討して決め

る」に留めた。常長は、自身の洗礼をきっかけに交渉を固めていこうと決心した。

1615年2月17日、常長はフェリペ三世の臨席を仰ぎマドリッドの王立洗足派女子修道院附属教会で、奥州王の大使として丁重な扱いのもとに洗礼を受けた。洗礼名はドン・フィリッポ・フランシスコとなった。

1615年8月22日、常長一行は、常長が受洗してから半年後にマドリッドを出発し、イタリアのローマに向けて旅立った。常長一行のローマ行きにはインド顧問会議の議長サリーナス侯らの反対があり、常長一行を早く日本に帰国させることをフェリペ三世に勧めたため、国王側もためらい6ヶ月もの期間を要した。

常長 ローマ法王パウロ5世に謁見

1615年10月25日、常長一行はローマに到着し、11月3日、常長、ソテロらはローマ法王パウロ五世に謁見した。スペイン国王フェリペ三世との交渉が不調に終わり、常長はひどく落ち込んでいたがパウロ五世の謁見によりやっと救われる思いがした。

この謁見は公式なものではなく、場所もバチカン宮殿東側の「シスト宮殿」の枢機卿の会議室だったが、パウロ五世はカトリックの威光がはるか遠くの日本にも及ぶことを示す法王の意地でもあった最大級のもてなしをした。

当時のローマは世界に向かう情報の発信地であり、ヨーロッパ各国は自国を宣伝する舞台にしていた。法王側は日本の情報を早く的確につかんでいた。幕府がカトリック教に弾圧を展開している日本国内で起っている現実には、ソテロが政宗のカトリック教への傾倒ぶりを説明するも説得力に欠けていた。またソテロ自身にも疑いがかかった。ソテロの所属するフランシスコ会と布教活動で競うイエズス会は、ローマ法王に天正遣欧使節を公式謁見させた実績があることから、「ソテロは天正遣欧使節をまねている」とソテロの野心を読み取り公然と批判した。

また日本の布教活動で先鞭をつけたイエズス会は長崎を拠点に西日本で勢力を伸ばしてきたが、後発のフランシスコ会が関東、東北に新天地を求めて活動し、ソテロがそこに大司教を置きたがっていることも批判した。法王側の内部は「政宗の狙いは交易による利益であり、いずれは幕府にしたがってカトリック教を弾圧するだろう」と疑った。ローマ法王との交渉も条約を結ぶにいたらなかった。



パウロ五世の肖像画
(仙台市博物館蔵)



支倉常長がローマ法王パウロ五世に差し出した政宗の書状
(ローマのバチカン文書館蔵の複製=仙台市博物館蔵)

夢ついでた政宗の「支倉常長 慶長遣欧使節」

1616年1月7日、常長一行はローマを出発し、再びスペインに向かった。スペイン国王側は幕府のカトリック教弾圧の強化と幕府と政宗の力関係を冷静に見ており、常長一行に用はなかったため、使節がマドリッドに寄ることを拒絶した。

1617年4月24日、常長とソテロは何の成果も得られない使節となったが、セビリア付近の村の修道院で粘り、スペイン国王フェリペ三世に交易許可を願う書状を書いた。名誉を重んじる侍の執念を常長に感じる。

1618年8月10日、支倉常長とソテロ一行は追いたてられてセビリアからメキシコまで戻った。メキシコでは3人の従者が幕府の弾圧に恐れをなし逃げてしまった。常長一行は更にアカプルコで日本から出迎えに来たサン・ファン・バウティスタ号に乗り、フィリピン（スペイン領）マニラに着いた。迎えにいった乗組員210人のうち約半数が航海中に死亡した。

マニラではオランダ人襲来のおわさが流れ、サン・ファン・バウティスタ号は軍用にフィリピン側に買収された。



慶長遣欧使節がたどった道筋
(朝日新聞 2013. 6. 6 掲載記事)

IV. 家康から政宗までの通商交渉の終焉（家光の鎖国）

徳川家康に始まり伊達政宗に引き継がれた「通商交渉の夢」は太平洋と大西洋を横断11年に及ぶ夢だった。通商交渉が失敗し夢ついていた時、三代将軍家光の時代に移り、その後、キリシタンを禁圧、鎖国を断行するに日本とスペインの関係は公式に終わったと考えられる。

日本とスペインの通商条約に興味を示したのは徳川家康とロドリゴ・デ・ビベロだった。2人はこの条約から得られるメリットを理解し、「平和協定条項（通商仮協定）」まで合意した。ロドリゴ・デ・ビベロが主張するオランダの存在を除けば両国の条件は日本にとってプラス面を受け入れたことで正しい評価をしていた。

ロドリゴ・デ・ビベロの帰国後、スペイン領メキシコ副王の特使セバスチャン・ビスカイーノが、スペイン国王フェリペ三世の答礼使節として来日し交渉に臨んだ。しかしビスカイーノはロドリゴ・デ・ビベロの合意状況を活用することができず、家康とロドリゴ・デ・ビベロの交渉プロセスを台無しにし、家康・秀忠の信頼も失ってしまった。

家康は、両国の貿易にとって利益をもたらすために、マニラ・ガレオン船貿易にとって安全上不可欠な港を日本に作ることを望んだ。ビスカイーノは発見したカリフォルニア沿岸の港・島・湾を港に使いたいと望み、そのための探査活動をすでに行っていた。しかしビスカイーノは野望に溢れたものの、何も達成することはできなかった。

仙台藩主の伊達政宗は、宣教師のルイス・ソテロを通訳として徳川幕府の許可を得て支倉常長慶長遣欧使節をメキシコ、マドリッド、ローマに派遣した。政宗の目的は、自分の領内でガレオン船貿易に関わらせること、ソテロの協力によりカトリック教の司教区をつくることにあった。しかし支倉常長のメキシコとの通商交渉は実らず、カトリック教の司教区をつくるために渡ったマドリッド、ローマでの交渉も失敗し、失意のうちに帰国した。

日本とスペインの通商交渉が成立しなかったことに3つの理由があった。

第1は、両国の利益が合わなかったことにある。日本は通商条約の確立を求めたが、スペインは日本をカトリック教国家にするために修道士の布教を促進させることに集中した。

第2は、ロドリゴ・デ・ビベロが届けた徳川家康の申し入れに対して、スペインのインディアス枢機会議の返答に長い期間がかかったことにある。そのため家康は「スペインの敵国＝オランダ」の通商申し入れを受け入れていた。

第3は、徳川の領地内でプロテスタント教のイギリスとオランダのために、交易を円滑にすることを目的として、ウィリアム・アダムスが賢明な役割を果たしたことにあった。結果として家康はカトリック教の布教と関わりのないオランダと貿易を行うことにしたのだった。

－ 登場人物その後 －

最高権力者 徳川家康—1616年4月17日死去（73歳）
答礼使節 セバスチャン・ビスカイノー—1615年以降死去（推定）（64歳～84歳）
ローマ法王 パウロ五世—1621年1月28日死去（68歳）
スペイン国王 フェリペ三世—1621年3月31日死去（42歳）
慶長遣欧使節 支倉常長—1622年7月1日死去（52歳）
宣教師 ルイス・ソテロー—1624年7月12日死去 大村（長崎県）の放虎原で火あぶり
（49歳）
二代将軍 徳川秀忠—1632年1月24日死去（53歳）
仙台藩主 伊達政宗—1636年5月24日死去（68歳）
ロドリゴ・デ・ビベロー—1636年12月死去（72歳）
三代将軍 徳川家光—1651年6月8日死去（47歳）

－ 参考文献 －

『日本見聞記』（たばこと塩の博物館発行）
『ガレオン船が運んだ友好の夢』（たばこと塩の博物館発行）
『16－17世紀 日本・スペイン交渉史』（大修館書店発行）
『日本とメキシコ友好400年－未来に向けて』（御宿町国際交流協会発行）
『日墨交流史』（日墨協会／日墨交流史編集委員会 PMC 出版発行）
“Una Historia de la Ciudad de Tecamachalco”（Kiyotoshi Katoda）
『遙かなるロマン 支倉常長の闘い』（河北新報社発行）
『メキシコに来た日本人使節』（パノラマ社発行）
『日本史用語集』（小川出版社発行）
『家康公の時計』（平凡社発行）
『家康公の外交政策（徳川恒孝氏講演会録）』（御宿町国際交流協会発行）
『メキシコ日本友好400周年記念行事記録集2009－2010』（在日メキシコ大使館発行）
『条約から条約へ－墨日国交120周年』（在日メキシコ大使館発行）

V. 日本におけるキリスト教の殉難者等の関連年表

1549年8月、日本にキリスト教の布教が始まり、1636年6月、鎖国命令が出され一切のキリスト教が禁止され、外国人との出入りや交わりを断ち切られた。この間に多数のキリスト教徒が来日して布教活動に勤めた。一方日本国内では時の権力者たちがキリスト禁教を強め処刑し弾圧していった。



クエルナバカの大聖堂に描かれた「日本二十六聖人殉教図」
(メキシコ、クエルナバカ市)

西暦(年月日)	年号	殉難者と当時の主な出来事
1549.8.15	天文 18 年	フランシスコ・ザビエル、鹿児島に上陸。イエズス会員による布教開始。
1565.6.17	永禄 8.年	バテレンの保護者 13 代将軍足利義輝、松永久秀らにより殺害。
1565.7.31	永禄 8 年	三好義継の奏請により、バテレン追放の勅令発布。
1566.	永禄 9 年	在日イエズス会員、バテレン 7 名、イルマン 7 名を数える。
1568.10.16	永禄 11 年	織田信長、足利義昭を奉じて入京。
1569.5.11	永禄 12 年	バテレン追放の綸旨、日乗上人に下付。
1574.	天正 2 年	大村領民、多くがキリシタンに改宗し寺社を破壊。
1580.	天正 8 年	キリシタン総数約 10 万人を超え、イエズス会員約 60 名となる。
1581.4.16	天正 9 年	スペイン国王フェリペ二世、ポルトガル国王となる。
1582.6.21	天正 10 年	織田信長、本能寺で自刃。
1582.6.22	天正 10 年	安土、大混乱となり、イエズス会の修道院略奪に会う。
1582.12.31 J	天正 10 年	九州のキリシタン大名らによる天正遣欧少年使節、ローマに向け出発。
1583.	天正 11 年	在日イエズス会員 85 名、扶養者他に 500 名、改宗者 8500 名。
1585.1.28	天正 12 年	教皇グレゴリオ十三世、イエズス会の日本布教独占を認める勅書を発す。
1585.4.10	天正 13 年	教皇グレゴリオ十三世、死去。
1585.8.6	天正 13 年	秀吉、関白となる。
1585.10.15	天正 13 年	キリシタン大名の高山右近、高槻から明石に転封。
1586.12.4	天正 14 年	薩摩の島津勢、豊後に侵入し、教会施設を壊滅。
1587.1.27	天正 14 年	秀吉、太政大臣となり、朝廷から豊臣の姓を賜る。
1587.7.24	天正 15 年	ポルトガル船の司令官、秀吉を訪問。同夜、秀吉、バテレン追放令を発し、長崎のイエズス会領を接收。
1588.8.初	天正 16 年	スペインの無敵艦隊、英仏海峡で敗北。
1590.7.21	天正 18 年	天正遣欧少年使節、ヴァリニャーニと共に長崎に帰港。
1590.9.7	天正 18 年	秀吉、伊勢松坂のキリシタン大名、蒲生氏郷を会津に転封。
1592.8.29	天正 20 年	秀吉の母、大政所、死去。秀吉、長崎教会の破却を命令。
1596.9.4	文禄 5 年	在日イエズス会員、フランシスコ会員の日本追放を決議。
1596.10.19	文禄 5 年	スペイン船サン・フェリペ号、土佐の浦戸に漂着。
1596.10.27	文禄 5 年	太閤秀吉、サン・フェリペ号の積荷没収を命令。
1596.12.8	文禄 5 年	太閤秀吉の命により、京都のフランシスコ会修道院が包囲。
1597.2.5	慶長元年	長崎の西坂で 26 聖人の殉教(宣教師パウティスタとキリシタンら)。
1598.9.13	慶長 3 年	スペイン国王フェリペ二世、エスコリアル宮殿で死去。 スペイン国王フェリペ三世、国王に即位。
1598.9.18	慶長 3 年	豊臣秀吉、伏見で死去、61 歳。
1599.2.25	慶長 4 年	イエズス会のペドゥロ・ダ・クルス、日本征服を勧める意見書を認める。
1600.8.25	慶長 5 年	細川忠興夫人ガラシャ、大坂の邸で壮烈な最期を遂げる。
1600.10.21	慶長 5 年	関ヶ原合戦、徳川家康率いる東軍勝利。
1600.12.12	慶長 5 年	教皇クレメンテ八世、条件付で托鉢修道会員の渡日を許可。

1602.6.25	慶長 7 年	托鉢修道会員 15 名、フィリピンから日本に向かう。
1602.10.	慶長 7 年	家康、フィリピン総督に宛て、キリシタン布教を厳禁すると通告。
1602.10.22	慶長 7 年	日本司教セルケイラ、托鉢修道会員の渡日を憂慮して転ずる。
1603.3.24	慶長 8 年	徳川家康、征夷大將軍となる。
1603.8.	慶長 8 年	宣教師ルイス・ソテロ来日。
1603.10.6	慶長 8 年	イエズス会の年報によれば、在日イエズス会員 119 名を救う。
1603.12.9	慶長 8 年	加藤清正、キリシタン南五郎左衛門らを処刑。
1605.6.2	慶長 10 年	徳川秀忠、征夷大將軍となる。
1605.8.16	慶長 10 年	長門萩城主毛利宗瑞(輝元)、老臣でキリシタンの熊谷元直を処刑。
1606.2.末	慶長 11 年	大村喜前、領内のバテレンを追放。
1606.	慶長 11 年	政宗の長女五郎八姫、徳川家康の六男松平忠輝に嫁ぐ。
1608.6.11	慶長 13 年	教皇パウロ五世、托鉢修道会員の渡日を許可する勅書を発す。
1608.11.30	慶長 13 年	マカオで日本人数十名、暴動を起こし官憲により鎮圧。
1608.	慶長 13 年	不干斎ファビアン、棄教。
1609.3.5	慶長 14 年	日本司教セルケイラ、日本各地の殉教者につき海外に報告。
1609.8.24	慶長 14 年	家康、オランダ国王から通商を求められ、これを許し朱印状を与える。
1609.9.30	慶長 14 年	サン・フランシスコ号、岩和田村田尻海岸沖で遭難、ドン・ロドリゴ漂着。遭難したスペイン人たち 317 人、岩和田村民に救出される。その他行方不明者と死者 56 人。
1609.10.29	慶長 14 年	ロドリゴ・デ・ビベロおよびスペイン人船長、駿府で家康に謁見。
1610.2.2	慶長 14 年	家康、ソテロに日本・スペインとの協定文を与える。
1610.1.22	慶長 14 年	家康、スペイン国王の側近宛の朱印書で、ヌエバ・エスパーニャからの船の入港を認める。ロドリゴ、その朱印状を受領。
1610.8.1	慶長 15 年	ロドリゴ・デ・ビベロ一行、京都の銀商人田中勝介らと浦賀を出航。幕府が建造した日本初の西洋式帆船「サン・ブエナ・ベントゥーラ号(120トン)」で太平洋を渡る。
1610.10.27	慶長 15 年	ロドリゴ・デ・ビベロ一行、アカプルコに帰着。
1610.	慶長 15 年	イエズス会員指導下のキリシタン 22 万名を教える。
1611.3.22	慶長 16 年	ビスカイーノ、田中勝介らと共に「サン・フランシスコ二世号」でアカプルコを出帆。
1611.6.11	慶長 16 年	サン・フランシスコ二世号、浦賀に入港。
1611.6.22	慶長 16 年	ビスカイーノ、ソテロと共に江戸で將軍秀忠に謁見。
1611.7.4	慶長 16 年	ビスカイーノ、ソテロと共に駿府に赴き、家康に謁見。
1611.11.8	慶長 16 年	ビスカイーノ、ソテロら仙台に到着、伊達政宗を訪ねる。
1612.4.21	慶長 17 年	キリスト教信者の岡本大八、処刑され、キリシタン禁止令が発せられる。
1612.4.22	慶長 17 年	有馬晴信、甲斐に預けられ、次いで斬首。幕府はキリシタン宗を禁じ、所司代に京都の教会を破壊させる。
1612.6.16	慶長 17 年	ビスカイーノ、大坂に到着、豊臣秀頼を訪ねる。
1612.6.20	慶長 17 年	有馬領で、キリシタンに対する迫害開始。
1612.9.1	慶長 17 年	秀忠、直轄領(長崎、京都、江戸)に禁教令発布。
1612.9.16	慶長 17 年	ビスカイーノ、「金銀島」探しに浦賀出航。

1612.10.3	慶長 17 年	ソテロ、幕府の黒船「サン・セバスチャン号」に乗船し浦賀出航。港外で難破。
1612.10.19	慶長 17 年	家康、秀忠、ゴアに復書、次いでフィリピンにも復書する。
1612.11.7	慶長 17 年	ビスカイノの船、台風に遭い航行不能、浦賀に戻る。
1612.11.21	慶長 17 年	オランダ国王、家康に好意を謝し、ポルトガルを中傷。
1613.	慶長 18 年	在日フランシスコ会員最多、29 名を数える。
1613.8.16	慶長 18 年	ソテロ、江戸で布教や医療活動をするも捕まり、火刑の宣告を受けるが寸前のところで伊達政宗に助けられる。 江戸でソテロの宿主らのキリシタン、処刑。
1613.9	慶長 18 年	秀忠、全国に禁教令発布。
1613.10.17	慶長 18 年	伊達政宗、ローマ法王やスペイン国王に宛てた書状を書く。
1613.10.28	慶長 18 年	支倉常長慶長遣欧使節、ソテロ、ビスカイノら合わせて 180 人以上が「サン・ファン・パウティスタ号」で月の浦出港。
1614.1.28	慶長 18 年	支倉常長慶長遣欧使節の乗船、アカプルコに入港。 家康、大久保忠熯を京都に派遣。
1614.2.1	慶長 18 年	家康、金地院崇伝にバテレン追放令を起草させ、徹底的禁圧開始。
1614.2.14	慶長 19 年	都のバテレンら、幕府から追放の通達を受ける。
1614.2.16	慶長 19 年	日本司教ルイス・セルケイラ、死去。
1614.2.21	慶長 19 年	都のバテレンら、潜伏した者以外は都を離れ長崎へ。
1614.2.25	慶長 19 年	大久保忠熯、京都に着き、数日にわたってキリシタンの教会を破壊。
1614.3.23	慶長 19 年	支倉常長慶長遣欧使節一行、聖週にメキシコ市に入る。
1614.4.15	慶長 19 年	京坂のキリシタン流刑者 71 名、京都を出発。
1614.5.8	慶長 19 年	支倉常長慶長遣欧使節一行、メキシコ市を出発。
1614.6.7	慶長 19 年	京坂のキリシタン流刑者、津軽に着く。
1614.6.10	慶長 19 年	支倉常長慶長遣欧使節一行の内約 30 名、ベラクルスのサン・ファン・デ・ウルーワからスペイン艦隊に乗船、ヨーロッパへ。
1614.10.14	慶長 19 年	支倉常長慶長遣欧使節一行、南スペインのサン・ルーカス・デ・バラメータ港に安着。
1614.10	慶長 19 年	イエズス会の長崎教会、破壊。
1614.10.21	慶長 19 年	支倉常長慶長遣欧使節一行、セビリアに到着。
1614.11.7~ 11.8	慶長 19 年	日本在住の大部分のイエズス会員宣教師ら、日本を離れマカオとマニラに追放。 転宗を拒否した近畿のキリシタン大名の高山右近ら 300 余名、マニラに追放。
1614.11	慶長 19 年	追放直前の在日イエズス会員 115 名、就中バテレン(宣教師) 62 名を数える。
1614.11.25	慶長 19 年	支倉常長慶長遣欧使節一行、セビリアを出発。
1614.12.20	慶長 19 年	支倉常長慶長遣欧使節一行、スペインの首都マドリッドに入る。
1614.12.26	慶長 19 年	大坂冬の陣で徳川方、豊臣方に敗北。
1615.1.20	慶長 19 年	徳川と豊臣の間に講和成立。
1615.1.30	慶長 20 年	支倉常長慶長遣欧使節一行、ソテロと共にスペイン国王フェリペ三世に謁見。
1615.2.17	慶長 20 年	支倉常長、フェリペ三世臨席のもと、王立跣足派女子修道院付属教会で受洗。洗礼名はドン・フィリップ・フランシスコ。

1615.4.28	慶長 20 年	アカプルコのサン・ファン・パウティスタ号で支倉常長慶長遣欧使節メキシコ残留組が、使節サンタ・カタリーナを乗せ、アカプルコ港を出港、帰国の途に。
1615.6.4	慶長 20 年	大坂夏の陣で豊臣方敗北。豊臣秀頼、自刃。 この戦闘中にバテレンら危難に遭う。
1615.8.15	慶長 20 年	支倉常長慶長遣欧使節残留組を乗せたサン・ファン・パウティスタ号、浦賀に帰着。
1615.8.22	慶長 20 年	支倉常長慶長遣欧使節、マドリッドを出発しローマへ。
1615.10.25	元和元年	支倉常長慶長遣欧使節、ローマに到着、11 月 3 日、ローマ法王パウロ五世に謁見。
1616.1.7	元和元年	支倉常長慶長遣欧使節、ローマを出発し再びスペインへ。
1616.6.1	元和 2 年	徳川家康、死去。
1616.9.18	元和 2 年	幕府、ヨーロッパ船の寄港地を長崎、平戸に制限。
1616.9.30	元和 2 年	幕府、イギリス船に関して発令。
1616.9.30	元和 2 年	仙台藩士の横沢将監、政宗の命を受け支倉常長慶長遣欧使節を迎えにサン・ファン・パウティスタ号で堺を出航。
1617.2.23	元和 3 年	横沢将監ら日本人 200 人、スペイン人ら 10 人を乗せた迎船がカリフォルニアに達する。航海中に約半数死亡。
1617.5.22	元和 3 年	アスンシオン、マシャード両バテレン、大村で殉教。
1617.6.1	元和 3 年	托鉢修道会のバテレンら、名乗り出て大村で殉教。
1617.7.4	元和 3 年	支倉常長、ソテロー行、セビリアを出港しアカプルコへ。
1617.7.27	元和 3 年	讃岐高松で石原アンタン孫右衛門、殉教。
1617.8.5	元和 3 年	流刑キリシタンのマチャスら津軽で処刑、殉教。
1617.9.10	元和 3 年	イエズス会管区長、9 月 10 日の都の証言他、全国信徒の証言を収集。
1618.4.2	元和 4 年	支倉常長、ソテロー行、迎船のサン・ファン・パウティスタ号でアカプルコを出帆しマニラへ。
1618.6	元和 4 年	イエズス会員アンジュリス、蝦夷へ渡る。
1618.7.初	元和 4 年	支倉常長、ソテロー行、マニラ到着。
1618.8.12	元和 4 年	ディエゴらのバテレン、マニラから長崎に潜入。
1618.9.30	元和 4 年	イエズス会内部の対立続き、ヴィエイラ、総長に直訴。
1619.8.7	元和 5 年	イエズス会員スピノラ、大村の鈴木牢に投獄。
1619.10.6	元和 5 年	京都で桔梗屋橋本太兵衛ら 52 名火刑、殉教。
1619.11.18	元和 5 年	イエズス会員木村レオナルドら 5 名、長崎において火刑、殉教。
1620.5.26	元和 6 年	ウイリアムス・アダムス、平戸で死去。
1620.9.4	元和 6 年	伊達政宗、領内でキリシタンの調査開始。
1620.9.22	元和 6 年	支倉常長慶長遣欧使節一行、ソテローをマニラに残し、便船で帰国。
1620.10.18	元和 6 年	伊達政宗、在フィリピンのソテローの扱いに付き、幕府重臣の土井大炊助に指示を求める。
1620.11.6	元和 6 年	伊達政宗、キリシタン宗を禁じ仙台藩水沢で信徒を処刑。
1621.1.18	元和 6 年	ドミニコ会員、イエズス会の妨害につきキリシタンらから証言を求める。
1621.1.28	元和 6 年	ローマ法王パウロ五世、死去。

1621.3.31	元和 6 年	スペイン国王フェリペ三世、死去。
1621.7.22	元和 7 年	フィリピンからバテレンの潜入続く。
1621.9.25	元和 7 年	中浦ジュリアン、ロ之浦からローマへ迫害下の近況を報告。
1621.11.7	元和 7 年	マカオ総督、オランダ船のポルトガル船妨害に関し幕府に告訴。
1622.1.24	元和 7 年	フランシスコ・ザビエル、聖人に列せられる。3 月 12 日、ローマで列聖式挙行。
1622.8.7	元和 8 年	支倉常長、死去。
1622.8.19	元和 8 年	日本に潜入したスニガ、フローレンスらのバテレン、処刑。
1622.9.10	元和 8 年	元和の大殉教(長崎の西坂で、スピノラら、キリシタンと共に 55 名殉教)。
1622.10.22	元和 8 年	ソテロ、マニラから薩摩に潜入しようとして捕まり、大村牢に投獄。
1622.11	元和 8 年	日本在住の托鉢修道会代表コリヤード、日本を発ってローマに向かう。
1623.3.9	元和 9 年	オランダ人、アンボイナ島でイギリス商館長と共に日本人を処刑。
1623.8.23	元和 9 年	徳川家光、征夷大將軍となる。
1623.12.4	元和 9 年	江戸の大殉教(江戸で、バテレンのガルペス、原主水ら 50 名殉教)。
1624.1.3	元和 9 年	イギリス商館、平戸から撤退。
1624.2.22	元和 10 年	仙台にて、バテレンのカルヴァーリュら水責めの刑で殉教。
1624.5.11	寛永元年	幕府、長崎奉行にフィリピン使節の將軍謁見申し出を拒否。
1624.6.12	寛永元年	幕府、江戸でキリシタン処刑。
1624.7.17	寛永元年	大村領小千浦で、トメ四五郎左衛門ら殉教。
1624.7.18	寛永元年	出羽国久保田城主佐竹義宣、キリシタン 33 名を処刑。
1624.8.25	寛永元年	ルイス・ソテロら、大村の放虎原において火刑で死去。
1625.	寛永 2 年	幕府、ポルトガル人の日本永住を禁止。
1626.4.9	寛永 3 年	ディエゴ・デ・サンフランシスコら、長崎を出発し東北へ。
1626.6.20	寛永 3 年	イエズス会管区長ら長崎で処刑され、同会の所有品多数を焼却。
1626.10.14	寛永 3 年	ローマ教皇ウルバノ八世、日本のキリシタンに宛て返書を認める。
1627.7.29	寛永 4 年	バテレンのベルトランら大村で殉教。
1627.9.6	寛永 4 年	バテレンの辻トマス処刑。この頃、殉教者相次ぐ。
1627.11.5	寛永 4 年	オランダ使節ピーテル・ノイツ、江戸で將軍謁見申し出を拒否。
1628.5.19	寛永 5 年	ディエゴ・デ・サンフランシスコ、仙台付近のキリシタンに出状。
1628.5.27	寛永 5 年	浜田弥兵衛、台湾でピーテル・ノイツに抑留される。
1628.5	寛永 5 年	スペインの艦船、シヤムで長崎の高木作右衛門の商船を焼沈。
1628.6.29	寛永 5 年	浜田弥兵衛ら、ピーテル・ノイツを襲い人質に。
1628.9.8	寛永 5 年	長崎で、バテレンら 11 名、火刑。
1629.9	寛永 6 年	オランダ人特使のヤンスゾーン、平戸へ。
1629.11.1	寛永 6 年	ディエゴ・デ・サンフランシスコ、上方でルイス・ゴメスと会う。
1630.9.26	寛永 7 年	大村領で 75 名殉教。
1630.12.14	寛永 7 年	島原城主の松倉重政、船をフィリピンに遣し、家臣に偵察させる。
1630.	寛永 7 年	コリヤード、スペイン国王に在日イエズス会非難の書を呈す。

1631.12.4	寛永 8 年	長崎奉行、キリシタンを雲仙岳で拷問。
1631.	寛永 8 年	コリヤード、スペインのインド顧問会議に陳情書提出。
1632.2.8	寛永 8 年	会津二本松、その他で約 70 名殉教。
1632.3.10	寛永 9 年	バテレンのディエゴ・デ・サンフランシスコ、上方以後消息を立つ。
1632.3.14	寛永 9 年	徳川秀忠、死去。
1632.9.3	寛永 9 年	バテレンの石田アントニオら、長崎で殉教。
1633.4.6	寛永 10 年	寛永 10 年禁令(奉書船以外の海外渡航禁止と海外居住 5 年以上者の帰国を禁止)
1633.8.15	寛永 10 年	これ以後、潜入バテレンのほとんどが穴吊しの刑を受ける。
1633.8.27	寛永 10 年	島原などでキリシタン 20 名、火刑で殉教。
1633.10.18	寛永 10 年	イエズス会代理管区長のフェレイラ、逆吊りの拷問の間に棄教。
1633.10.21	寛永 10 年	中浦ジュリアン、逆吊りの拷問の間に絶命、殉教。
1634.7.6	寛永 11 年	バテレンのヴィエイラ、江戸で殉教。
1635.7.12	寛永 12 年	寛永 12 年禁令(朱印船による海外渡航、ならびに海外在住日本人の帰国禁止)
1636.6.22	寛永 13 年	通商に関係のないポルトガル人追放。
1636.9	寛永 13 年	ポルトガル人の妻子 287 名、マカオに追放。
1637.9.27	寛永 14 年	ドミニコ会員、琉球から薩摩を経て長崎に送られ、処刑。
1637.10.14	寛永 14 年	潜入バテレンのマストリーリ、長崎で拷問に合い殉教。
1637.12.11	寛永 14 年	島原の乱勃発(キリシタン農民、天草領主の寺沢氏と島原領主の松倉氏らの圧政に蜂起。小西氏遺臣・益田甚兵衛の子という天草四郎時貞を大将として 3 万 8 千人の農民が原城に籠城)。
1638.4.12	寛永 15 年	老中松平信綱率いる 12 万人余の幕府軍により、島原の乱鎮圧。この戦いにオランダ船が参加。
1639.2.3	寛永 16 年	フランソワ・カロン、オランダ商館長に就任。
1639.9.2	寛永 16 年	拘禁中のポルトガル代表、長崎奉行所で国外追放令を受ける。 寛永 16 年禁令(ポルトガル船の来航禁止)
1639.10	寛永 16 年	平戸・長崎のイギリス人、オランダ人の妻子搭乗船、平戸を出航。
1640.	寛永 17 年	井上筑後守、幕府の宗門改役に就任し、宗旨人別帳の作成。
1640.7.6	寛永 17 年	マカオ使節ルイス・パエス・パシエら、長崎に着く。
1640.8.3	寛永 17 年	マカオ使節ルイス・パエス・パシエら 61 名、長崎の西坂で斬罪。
1640.11.9	寛永 17 年	オランダ商館長のフランソワ・カロン、平戸商館の破却を宣告。
1640.12.1	寛永 17 年	ポルトガルで暴動勃発。ブラガンサ王朝のジョアン四世国王になる。
1641.1.28	寛永 17 年	ポルトガル、60 年間のスペイン国王の支配から独立宣言。
1641.2.10	寛永 18 年	オランダ商館長のフランソワ・カロン辞任し、5 日後日本を去る。
1641.5.11	寛永 18 年	オランダ商館長のルメール、江戸に至り、長崎でのみ貿易を許可。
1641.6.24	寛永 18 年	オランダ商館、平戸から長崎出島へ移転。
1642.	寛永 19 年	バテレン 5 名、従者 5 名、潜入を敢行し捕らえられる。
1643.3.16	寛永 20 年	1642 年潜入したバテレンら、拷問にあつて殉教。
1643.4.8	寛永 20 年	将軍家光、バテレン糾明の席に連なり、以後再三に及ぶ。

1643.6.27	寛永 20 年	バテレンのマイケスら潜入。次いで岡本三右衛門(キャラ)ら糾弾され棄教。
1647.7.26	正保 4 年	ポルトガル人、日本貿易再開を企て、特派の一船、長崎に入港。
1650.11.5	慶安 3 年	転びバテレンの沢野忠庵(フェレイラ)、死去。
1678.	延宝 6 年	1643 年潜入の日本人イルマン、棄教後に死去。
1685.	貞享 2 年	転びバテレンの岡本三右衛門(キャラ)、死去。
1687.	貞享 4 年	「切支丹類族調法」発布。禁教の徹底を図るため、家族ごとに宗旨と檀那寺を記載。
1690.1.30	元禄 2 年	土佐の転びキリシタンの桑名古庵、獄中で病死。
1690.10.1	元禄 3 年	大村牢の南蛮人ミゲル、死去。
1695.	元禄 8 年	「切支丹類族調法」一部改定。
1700.	元禄 13 年	1643 年に潜入のバテレンの従者、棄教後に死去。
1708.10.12	宝永 5 年	イタリア人バテレンのジョヴァンニ・シドッティ、マニラからスペイン船で屋久島に潜入。

* 1582 年 10 月 15 日からグレゴリオ暦が施行されたが、日本、インドに通達が遅れたので、在日イエズス会員は数年後から新暦に改めた。1582 年 10 月 15 日以降でもユリウス暦の場合には、「西暦欄」の日にちの後に“J”を付した。

－ あとがき －

1599年（豊臣秀吉死去の翌年）に徳川家康はルソン（フィリピンの古称でスペインの植民地）第6代総督のフランシスコ・テーリョ・デ・グスマンに送った書状に「我が国とヌエバ・エスパーニャ（スペインの植民地）を頻繁に結ぶ商船の姿を見る以上に余の心を満たすものではないだろう」と記し、貿易および外交関係の開設を望んでいました。

1608年、ロドリゴ・デ・ビベロがルソン臨時総督兼司令官に着任して間もなく、二代将軍秀忠に送った書簡に「ルソン提督として着任した今年の夏に、閣下が我が前任者と交誼を結ばれていたと知るに至り、大いに喜びました。古く堅固な待遇をいかに拡大するかをお伝えするに至り、機会を逸したこと、あるいは勤勉さを欠いたかどうかを申し上げたくございません。ゆえに関東に1隻のガレオン船を派遣いたします。その船長には閣下に対する私の代理を務めるべく託してありますので、船長およびその部下に良きおもてなしを賜わりますようお願い申し上げます」と記されていきました。

その翌年の1609年、ガレオン船「サン・フランシスコ号」が、上総国夷隅郡岩和田（現在の千葉県夷隅郡御宿町岩和田）田尻海岸沖に漂着し救出されました。救出された人々はマニラの臨時総督任務を終えてヌエバ・エスパーニャに帰国途中のロドリゴ・デ・ビベロを長とする一行317人でした。

ロドリゴ・デ・ビベロと彼の随員は家康に謁見し、最上のもてなしを受けたのみならず、一つの条約“Capitulacines”（契約、協定に相当）の交渉に応じる意向を示しました。その要約は本文中に記述しました。協定書に署名・捺印して写しを3部取り、批准を求めてエスパーニャ（スペイン）へ送りましたが、その返事が届くことはありませんでした。

しかし、ロドリゴ・デ・ビベロの進言は無視されたわけではありませんでした。1611年にヌエバ・エスパーニャ副王ルイス・デ・ベラスコが、スペイン国王フェリペ三世の答礼特使としてセバスチャン・ビスカイーノを日本に派遣しました。

伊達政宗が派遣した支倉常長慶長遣欧使節は、家康が始めた外交交渉を引き継ぐように派遣されました。常長は、メキシコのガダルカサル総督、スペイン国王フェリペ三世とカトリック勢力の代表・ローマ法王パウロ五世と交渉しました。本書は、その経緯をまとめました。幕府がカトリック教の弾圧を展開している日本国内の状況も年表にしました。

御宿での救出劇に見た人類愛は、家康とロドリゴ・デ・ビベロの「平和協定条項」の合意を生みました。しかしセバスチャン・ビスカイーノが求めるカトリック教の布教と「金銀島」の探索調査により両国間に亀裂を生じ、その後伊達政宗の支倉常長慶長遣欧使節が派遣されましたが失敗しました。幕府はその20年後、世界に向けた窓を小さくしてしまう「鎖国」という外交上の転換期を迎えました。

本報告書のために貴重な資料をご協力いただいた宮地理恵子さん、御宿アミーゴ会の河東田清俊さん、編集にご協力いただいた御宿アミーゴ会の学芸員有資格者山口文さんにお礼を申し上げます。



御宿町・テカマチャルコ市姉妹都市締結の調印式

2013年10月23日、御宿町はメキシコのテカマチャルコ市と「姉妹都市締結」を調印。この調印式には「メキシコ友好親善使節団」が派遣されました。

テカマチャルコ市はメキシコ中部のプエブラ州に位置する人口72,000人の都市です。日西墨交流発祥の最も関係が深いロドリゴ・デ・ビベロの生誕地はテカマチャルコ市にあり、ロドリゴの霊廟サン・フランシスコ元修道院もあります。両都市間に姉妹都市として大事な要素があります。交流が調印だけで途絶えてしまうのではありません。今後も交流を続け、姉妹都市としてより絆を深めるために、調印後具体的に何を行うかを開始しています。日墨学生交流により、テカマチャルコ工科大学生を中心として20名の学生が本年2014年7月から1カ月にわたって来日し日本語と日本文化交流を予定しています。

来日するメキシコの大学生たちはホームステイ、民宿、千葉工業大学、神田外語大学、中央国際高等学校等のご協力をいただき、有意義な日本での生活を体験していただきます。

日本スペイン400周年記念に際し、幸運にも支倉常長一行が辿ったアカプルコ～タスコ～メキシコ市～プエブラ～ベラクルスを辿ることができました。メキシコ現地で大勢の関係者のご協力を賜りました事に厚くお礼を申し上げます。

御宿での人類愛による救出400年。新しい未来に向けた同市のテカマチャルコ工科大学の学生交流プロジェクトが姉妹都市調印により、メキシコ政府の「支倉常長 慶長遣欧使節」2014年認可事業として計画されていることを付記いたします。

2014年2月

御宿町国際交流協会
会長 土屋武彌